

通じて健康的な食生活を営める能力を身につけることが目標ですが、「みえの食育推進ネットワークプロジェクト会議」を立ち上げ、保育園や幼稚園、小学校の食教育担当者などさまざまな人との連携で食育をすすめていきます。すでに教育委員会でモデル校を三校（小学校二校、養護学校一校）指定し推進しているのですが、地域や農林水産商工部関係の人も巻きこんだ形で食育にとりくむモデル園・校をつくってきたいです。

国では「食生活指針」が出ましたが、その地域版として三重の食生活を生かした「みえの食生活指針」成人編と子ども編を策定します。その指針をもとに、食育や地場産業などの普及啓発をになう活動をするボランティア養成にも力を入れていきたいです。

——農政や教育部門との連携について、市町村支援を行っているのですか。

岡田 農林水産商工部の事業に関連した「地産地消ネットワーク」というものがあるのですが、そのメンバーにヘルスメイト（食生活改善推進員）がかなり入っています。そのなかで、これまでの「健康や栄養」とは異なるさまざまな情報や知識を得て、質をパワーアップして地域に還元しています。料

理教室などでも県産品を積極的に使ったり、食べ物を大事にしなければいけないということも伝えてくれています。

教育委員会との連携については、中学校などにヘルスメイトが入りこみ、生徒たちが「ヘルシービーブルみえ21」の数値目標を達成しようとする行動を支援しています。

三重県は市町村の栄養士設置率がとても低いのですが（六九市町村で二三人、約三三％）、昨年度ようやく嘱託や臨時の方を含めた四一人で市町村栄養士協議会を立ちあげました。研修会を開いたり、ネットワークを強化させていますが、研修の場には農林や教育委員会の方に講師としてどんどん入っていただきたいと思っています。

——最後に、食生活改善や食生活指針の普及啓発における他部局との連携について、他の都道府県の方々へのアドバイスなどがあればお聞かせください。

岡田 私たちが大切にしたことは、相手の仕事に興味をもって物事を行うということ。健康福祉部で聞く県民の方が参加するような大会に、農林水産商工部の事業をPRする部分を設け、農林サイドでも同じように健康福祉部が発表する場を設置してくれるなど、相互の歩みよりを念頭において行動す

ることでもうまく連携ができました。

健康のために歩こうと思っても道がなければ歩けないわけで、土木関係の部局も健康づくりをになっている。健康という切り口はとてもツールが多く、県庁全体を動かすような仕事だと改めて気づきました。とにかく視野を広げること。

それから、数値目標を設定しそれを達成することだけが評価につながると勘違いしがちですが、数値はあくまでも目標を形に示しただけであり、まずは何かはじめましようところから働きかける姿勢が大切です。

栄養士はどうしても栄養の部分に固執しがちで、毎日それだけに追われて忙しがっているという部分がなきにしもあらずですが、私はこの計画を策定しながら、自分がヘルスプロモーションの一部をになっていることを実感しました。

たくさんの人を巻きこんで楽しくやるのが大事ですね。職員が楽しそうだったら住民の方ものってくれると思います。

——本日はお忙しいなか、どうもありがとうございます。



清野富久江氏（聞き手）